

令和元年度第1回苫小牧市福祉のまちづくり推進会議 議事録

■ 日 時：令和元年8月21日(水) 15時30分から17時00分まで

■ 場 所：苫小牧市役所本庁舎9階 第2委員会室

■ 出席者：9名

<委員>

栗山 昌樹（議長）

荒物屋 貢一 伊藤 康博 江尾 清 篠原 一弘 長田 昌聰

水口 哲二 横山 末世 渡邊 春子

<事務局>

山田福祉部次長 寺西障がい福祉課長 稲場課長補佐 ほか担当3人

■ 欠席者：6名

<委員>

荻野 雅治 高橋 美穂 松原 敏行 水内 雅史 横山 武三

大久保 佳美

(敬称略)

■ 次 第

1 開 会

2 議 事

(1) 苫小牧市福祉のまちづくり表彰について

(2) 公共施設のバリアフリー化事業について

3 討 議

(テーマ：心のバリアフリーについて)

4 閉 会

■ 議事録：討議についてのみ次項以降に掲載

【討議】 ※ 約 60 分間

■ 事務局：長谷部主査（障がい福祉課）

（討議に係る趣旨の説明）

- 2020年東京オリンピック・パラリンピックが来年に控えている。
- この世界的なイベントに向けて、国がユニバーサルデザイン 2020 官邸閣僚会議を起点としてバリアフリー等の推進を図ることを明言している。
- 観光客、パラリンピック選手など海外からの来日者が増える見込みであり、日本とは異なる文化やルールに基づいた人々が交流する場になるので、バリアフリーの推進を図る最も有効な機会であるという認識を国が発信している。
- ハード面のバリアフリーについては、例えば、リフト付きのバス、ユニバーサルデザインタクシー等の導入を促進する動きがある。
- 対して、心のバリアフリーについては、各分野での学習や研修を起点として推進することが求められている。
- 学習や研修は、町内会での研修、学校教育での授業、企業での接遇研修などが例示されている。
- 苫小牧市における心のバリアフリーについて、このまちにどのように浸透させることができるのか、本推進会議をスタート地点として取組を進めていきたいと考え、この討議の場を設けるに至っている。
- 討議開始の前に、国が作成した DVD を視聴し、参考としていただきたい。

-（DVD 視聴：約 10 分）-

(討議)

■ 議長：栗山委員（苫小牧工業高等専門学校）

- 各委員、1人につき3分程度の発言をお願いする。

■ 篠原委員（苫小牧市こども通園センターおおぞら園）

- 小学校の出来事で、先天性の障がい（顔貌の変形を伴う）のある子供を見たときに、怖いと言った子がいた。しかし、言われた側の障がい児は、「そのうち見慣れるから大丈夫だよ」と友達に声を返した。
- この障がい児は、色んな苦労や嫌な思いをしてきたと思うが、自分の持っている障がいを受け止めて、行動していることが分かり、脱帽した。
- 障がいや色々な特性を持っている人々は、身の回りにたくさんいることを感じ合える機会を作ることが必要だと考える。
- 特別学級が小中学校では開設されていて、子供たち同士が交流する機会があり、障がいの有無にかかわらず接する機会はあるが、気持ちの上での交流や理解までにはたどり着いていないと考える。
- 車いす体験等の機会はあるが、気持ちの交流をどう行っているのかが大事だと思う。
- 自閉症について、40年ほど前だが、親の育児能力の問題に起因していると言われていた時代があった。今では、疾病の理解が進んでおり、脳の機能性の障がいだということが判明してきている。
- 20年ほど前から知的にあまり遅れがない自閉症の人々の体験する世界について本や講演で知る機会が多くなってきた。そのような内容から、「感じ方が

違う」ということが分かるようになった。

- 自閉症とは感じ方の違いである、ということを知り子供の時代から知る機会があれば理解できるようになるのではないかなと思う。

■ 長田委員（苫小牧市老人クラブ連合会）

- せっかくの機会なので、東京のお寺の住職※による勉強会での話をしたい。

(※密蔵院和尚 名取芳彦)

- 人間生きているうちは、毎日イライラ、モヤモヤしながら生きている。それらをなくし、何事も心穏やかに毎日過ごすことが心のバリアフリーだと書いてあった書物があった。そこに書いていた5項目の内容を紹介する。

- 1つ、「お先にどうぞという気持ちで生活しなさい」

人間関係で大切なのは、イライラの原因がなにかということ、自分の都合と相手の都合のぶつかり合いでイライラが発生する原因。一息ついてお先にどうぞという気持ちになればイライラもなくなる。

- 2つ、「心配するのではなく、相手に対して心配りの気持ちになる」

心配するというのは相手に対して自分が期待を求める感情であるので、そういうことを無しにして、相手が自分に対して求めている、期待していることに気付いて、そのことに対して心を配ってあげる。

- 3つ、「相手と自分とズレがあるのは人間関係の醍醐味である」

他人や家族と話をしている、話や考え方が違うことで対立することがあるが、そのズレを、醍醐味である、という捉え方をしている。ズレが生じるからと言って、自分の考えを言わないと相手に伝わらないので、自分を主張するこ

とを継続する、そういう人間関係を作っていく。

- 4つ、「自分が行動を起こしたときに、相手に迷惑が掛かるかどうか心配することはない」

迷惑をかけることは自分が判断してそう思うだけで、相手に迷惑かどうかはわからない。迷惑かどうかは相手が決めること。迷惑をかけるかもしれないけれどもと前置きをしたうえで行動する。

- 5つ、「変化を楽しむ」

体調を崩したり年齢を重ねていくと体にガタが来るが、人間には、特に日本には四季折々の変化が如実にあってその変化を楽しめる感覚を持って相手に接する。

■ 水口委員（苫小牧市ボランティア連絡協議会）

- 点字ブロックについて、その上に自転車が停めてあるのを見かけた際には、移動するようにしている。しかし、他人の所有物ということもあり、果たして良いことなのかかわからないが、常識の範囲内でしている。
- バリアフリーの浸透ということでは、市民などに対して指導を行うのは難しいが、周知などに取り組むことは必要だと思う。苫小牧市において、あいさポート運動があるので、今後も推進していくことが貢献につながると思う。
- バリアフリーの考え方では、皆で行動を起こして困っている人に気付き、声掛けから始めることではないかと考える。
- 子供達について、子供の時からの教育が必要だと考える。障がいのある人が

社会において普通の暮らしができる社会を作る。学校の福祉教育も活用すべきではないか。

■ 横山（未）委員（苫小牧市法人保育園協議会）

- 10年以上前だが、耳の全くない1歳の子供が入園したことがあった。髪を伸ばして耳が隠れるようにしていたが、周りの子供達は耳がない様子を見てもなんとも思っていない。嫌な感じを持たないようだ。
- 周りの子供に対して、その子の事を、「お母さんのお腹にいたときから耳がなかったんだよ」と説明しても、自然に受け入れられる感じがある。
- しかし、年長クラスになると物心などが芽生えるようで、自分や周りの見方の影響なのか、少し嫌な言い方が出てきてしまうことがある。
- 子供達に与える影響は、大人の声掛けだったりするのかなと思う。ちょっとした言動だったり、何気ない受け取り方だったりするのかなと思う。
- 私達の姿勢が大切で、何気なく自然に言っていることでも、嫌な部分を子供達が受け取ってしまう。非常に難しいと思う。
- 昔は、「道ですれ違った人に挨拶しなさい」と言っていたが、最近は「知らない人に声を掛けたらダメだ」と言わなくてはならない時代になったと感じる。

■ 渡邊委員（公募）

- 3つほどボランティア活動をしているが、そのうちの1つである市立病院でのボランティアでの出来事をお話する。
- 車いすに乗り、杖を持ちながら牛歩の如く歩みに時間がかかる方がいた。そ

の方は、ヘルプマークを持った患者さんで、お手伝いの声を掛けたら素直に必要だと応じてくれた。

- ボランティアの基本は、「必要な方に必要なことだけをしなくてはいけない」というもの。こちらが手助けが必要かなと思ひ、手を差し出しだすと、憤慨される方もいるので、気を付けながら活動している。
- 別のケースで、病院の玄関から入ってきたが、そこから全く動けなくなった女性がいた。その女性はパーキンソン病であり、一旦歩みが出ると、どんどん進めるが、その女性の場合は、一旦止まると全く動けない状態だった。
- その女性から、「私の足の前にどちらかの足を出してください」と言われ、その通りにしてみると、ようやく一歩が出た。
- このような活動を繰り返していることで、皆さんそれぞれの病気があり、実際に困っている方がいると体験しながら日々活動している。
- 横山（未）委員が発言されていましたが、子供達は障がいのある子に小さい頃から接していると全く違和感なく遊んであげることが出来るし、関わる事が自然に出来る。
- 現在は特別支援学級があり、障がいのある子が隔離された状態になっている。
- 体験談を話すか、小学校に入学してしまうと、障がいのある子に向かって、心無いことを言うてしまう子がいた。それが未だに続いている。
- 私自身も身体障がいがあることもあり、そのことが許せなくて、心無いことを言うてしまう子の親御さんに注意したいという心の葛藤がずっと続いていた時期があった。

- なるべく早めに子供達が、小さな頃から障がいのある子に接する機会を設けることで、穿った見方や言い方をしない子が育つのではないかと思う。
- 大人達も、自分が知らない事柄を聞いたりする際に、「変だ」とか「おかしい」という言い放ち方をする人が多いように思う。
- 穿った見方や誤った見方でなく、個々人の特性を理解してあげることが、これからの社会に必要なと思う。

■ 江尾委員（苫小牧視覚障がい者福祉協会）

- 心のバリアフリーの原点というのは心の優しい人を作ることだと思う。子供の頃から優しい心を作っていく家庭教育と学校教育の2本立てが必要。
- 忙しい世の中だから家庭教育は行き届かないことがあると思うが、家庭と学校の両面で、心の優しい子を作っていかななくてはいけない。
- それと同時に障がいのある当事者が、私は視覚障がい者ですが、色々な場面に出ていく。そうすることで、「視覚障がい者はこういうところで困っている」ということを、言葉で言うのではなく見てもらおう。見ればわかることなので。
- 繰り返しになるが、私達、障がい当事者も外に出ていかなければならない。障がい者とはどういうものなのか、周りがそれをわからないことが課題。
- 外に出ていくということで、私はあちこち旅行して歩くのですが、対応に地域差がある。
- 北海道で言えば、函館や札幌、旭川など視覚障がい者の学校があるところは、障がい者・視覚障がい者に対して市民が慣れている傾向がある。
- そして、若い人や女性の方が親切。男性に声を掛けてもわからない。わか

らないというのは、多分どうしたらよいかかわからないのではないかと思います。

年齢が高くなるにしたがってどうしていいかわからない。日本人は臆病だ。

- 今の若い人は率先して助けに入ってくる。そういう面では、これからその若い人が社会が増えていくので良いのではないかと思います。
- 交通機関についても、都会と苫小牧とでは大きな差がある。苫小牧はバスの案内なども随分遅れて導入されている。そして、決まったことを決まった通りにやらない。
- 取組としては、子供達に色々な人がいることを教えて、障がいのある当事者が外に出て行って、その姿を見てもらう。
- そのような取組で、人々が通い合えば、住みやすいまちになってくのではないかと思います。
- 最近のニュースを取り上げるが、横断歩道での視覚障がい者の死亡事故がありました。このケースでも実際に誰かが死なないと直らない。(対応がとられない) これが一番の問題。

■ 荒物屋委員（苫小牧市体育協会）

- （心のバリアフリーは）理想と現実のギャップを感じるテーマだと思った。
- 体験談を話す。施設の出入口のドアについて、自分が通った後に、次の人が入るのであればそのまま押さえてあげるという行為。これは、障がい者だとかは関係なく、普通の人にもしてあげることだと思う。
- エレベーターのドアの開閉や、バスなどで座席を譲るのも同じこと。基本的には、このようなことを日常的に行えば少し変わっていくのかなと思う。

- まちに浸透させるためには、例えば、障がい者支援施設などの公共施設の貸会議室等を活用して、町内会などの一般利用者に対して自由に開放し、障がい者・児と利用者が、出会う、触れ合う機会を作る。そういった中で新たな動きも出てくるのかなと考える。まずは、実際に接しないとわからない部分もあると考えるので。
- 他にも、旅行会社や行政において、色々な事業の中に、ツアーのような形式で障がい者や高齢者に一定枠で参加してもらい、一般の方が一緒に行動する機会を設けていくなどの取組はどうだろうか。
- また体験談だが、外国でジョギングをすると日本人同士では挨拶もしないが、外国人は声を掛け合う。自分も見習って挨拶をするようにした。
- この経験から声を出すことは大事だと思った。バリアフリーというのは自分の心の壁を破るということで挨拶は大切だと思う。自分の心の壁を取り払っていかないと、心のバリアフリーは広がっていかないのかなと思った。
- 子供達への教育も非常に大事で、先生や親など大人達の姿を子供達は見ていと思う。大人達がまずあるべき姿を見せて、どうして必要なのかを説明していく。
- 心のバリアフリーについては、簡単な方法はなく、地道にやっていくしかないのかなと思う。

■ 伊藤委員（苫小牧市社会福祉協議会）

- 心のバリアフリーを進めるためのポイントの一つに教育があると思う。
家庭の教育であったり、学校の教育であったり。

- 「メダカのメグ」という教材がある。内容は、大きな魚にヒレをかじられたメダカのメグが、思うように泳げなくて、仲間のメダカにいじめられるというもので、終わりには、「みんなどう思う？」と問いかける。子供達からは、「助けてあげる」などの声が聞こえてくる。
- このことについて「これではダメだ」と話す先生がいた。理由を聞くと、子供達に「メダカのメグ＝助けられる存在」だという点のみに視点が向かい、思うように泳げないメグは自分たちとは違う存在だと植え付ける一因になる。
- そのような理由から、この教材は進め方によってはあまり良いものにならないと社会福祉協議会の内部ではよく話していた。
- 福祉の学習を色々な形で行ってきた。実際にどのような困りごとがあるのかを知るためには体験学習は非常に大切だ。だが、それだけで終わってしまうと、「車いすユーザー＝困っている人」と認識され、「助けなくてはならない人」という植え付けで終わってしまう。
- その感想は「道徳（の授業）」としては良くて、福祉学習としては成功だというように捉えられてしまう。しかし、それは自分たちと障がいのある人との区別を認識することにつながり、やがて差別になってしまう。
- このようなことが徐々にわかってきて、福祉学習はやり方がすごく重要だと再認識した。なので、体験で終わってはいけないという考えになり、この考えを学校の先生方と共有しようと思ったセミナーが昨日の新聞記事だった。
- ある学校で小学校高学年を対象に、車いすユーザーでダーツをやっている方が講師をする福祉学習があった。

- その内容は、車いす体験でも、講話でもなく、ダーツで遊ぶ、ただそれだけの内容だった。福祉学習の最後の質問タイムは、大抵の場合「困ったことは何ですか?」「トイレはどうしているの?」となるが、このケースはそうではなかった。
- 質問は、「ダーツの的はなぜ丸いのですか?」「最高点は何点ですか?」や果てには、「奥さんとどこで知り合ったの?」などというように「人」に興味を持った内容ばかりだった。
- この結果は、道徳の授業としては物足りないのかもしれないが、福祉学習の原点ではないかと思うので、そういう学習を勧めたい。だから、学校の先生方と共有したいと考え、いま力を入れ始めている。
- 私自身は障がいがないし家族に障がいがある人はいない。そういう意味では自分が障がいに関しての理解が出来ているかというのは正直わからない。
- 自分も差別していたのだなと思うときがあったし、世の中には同じように考える人がいっぱいいるのだろうと思う。ただ、心無い言葉をかける人はほんの一部だとも思う。でも、ほんの一部であるからこそ、それだけ言われた人の心に残る。
- 困っている人がいたら助けるという、そんな世の中になってきていると思う。でも、やっぱり誰かを助ける時には、どこかで「自分は助ける人」「相手は助けられる人」という区別の心があり、それがあると心のバリアフリーは進まないと思う。
- この部分を変えていくのは子供の頃から教育していくべきなのではないかと

思う。

■ 議長：栗山委員（苫小牧工業高等専門学校）

- 学校でも昔よりも障がい者に対する見方がだいぶ変わってきた。耳が難聴の生徒もだいぶ増えてきたが、別段違和感なく付き合える。
- うちの学校には軽度の生徒が多いが、健常者の中にどんどん混ぜていくことで偏見などが段々薄れて、対応に慣れていくのではないかと思った。

（子供達に向けた心のバリアフリーに絞った自由発言）

■ 水口委員（苫小牧市ボランティア連絡協議会）

- 横山（未）委員が発言したように、子供達に挨拶をするが、それを子供達が変な受け止め方で考えるようになる。警察の防犯メールに、「公園で30代のおじさんがスマホで写真を撮っていました」とか、ちょっとしたことに過敏になっている。
- なぜそんな風になるのか、古い人間の考えかも知れないが、「子供達に注意してもダメだ」というように、何をしてもダメだダメだと、なにかおかしい社会になったなとつくづく感じる今日この頃だ。

■ 荒物屋委員（苫小牧市体育協会）

- 朝の交通安全ボランティアについて、子供達の方から話しかけてくると聞くので、子供達は純粹だと思う。やはり最初が肝心で、近所の子供に「おはよう」と言うと、小さい声で「おはよう」と返ってくる。こんな取組を続けていくと変わっていくような気がする。地道な声掛けが大切。これは、子供だ

けでなく大人も同じかなと思う。

- ごく一部難しい課題を持っている人もいると思うが、大方の人は優しいと思う。ただ一番最初に声を掛ける勇気があるかどうかという問題もある。一人が行動したら、他の誰かが協力してくれる。この一人目の行動がなかなか難しい。日本人が積極的ではないせいかもしれないし、気持ちがあってもできない。この一声がかけられないということが課題なのだと思う。
- 自分自身も同様だと感じるので、そういうところを子供にも伝えていきたい。子供だけでなく大人も実践していくと広がりも出てくるのかなと。まずは実践できる人が行動していくのが重要だと考える。

■ 長田委員（苫小牧市老人クラブ連合会）

- 教育というのはすごく大事だと思う。行政は、障がい者というか弱者に対して、最近は力を入れていると感じる。しかし、学校教育の部分での、弱者に対する取り組み方はどうなのだろうか。教育のカリキュラムに低学年から組み込まれているのだろうか。できていなければ、そこからやっていかななくてはならない。
- そして、教育の内容については紙面や講話だけで行うのではなく、体験型が非常にインパクトがあり効果的だと思う。また、一般の社会生活上で、重要なので、子供達に弱者に対する教育をやってもらいたいと思う。

■ 議長：栗山委員（苫小牧工業高等専門学校）

- （教育カリキュラムへの組み込みについて）学校側も結構疲弊していて、先生も大変だからなかなかそこまで手が回っていないと思う。

- 学校では、どちらかというとなががい者の方とそうでない方を隔離する傾向にある。特別支援学級だとかがその例だ。このような部分に対してどのように取組をしていくかを考えなくてはならない。
- 高等教育の現場では、隔離の傾向はなく生徒たちは混ざっている。ただ、障害者支援に関する法律があるので主に建物、ハード面の整備を進めている。

■ 水口委員（苫小牧市ボランティア連絡協議会）

- 福祉教育について、社会福祉協議会では大昔前から取組を進めているが、課題もあり、あまり進展してないのが実情だと思う。

■ 渡邊委員（公募）

- 社会福祉協議会の広報誌で見かけますが、高校生がよくボランティアを体験している。小さな頃から経験することが大事だということは皆さんが発言されているとおりに思う。一方で経験しただけで終わらせてはいけないという部分もある。
- 私自身、重度の身体障がいがあり、身体障害者手帳の等級は2級という状態。だが、世の中にどんどん出ていける状態であり、20年、30年と仕事に務めてきた。なので、外に出て人に話しかけることは全然問題ない。
- 江尾委員の発言のとおり、障がいのある人がなかなか外に出てきてくれないというところが今後の課題だと思っている。それで、明るいまちづくりを進めるためにこの会議に参加し、「どのようにしていったらいいのか」というところにいつもぶつかっている。
- 障がいのある当事者の意見を全然聞く機会がないので、どこが困っているの

かがわからない状態。なので、一度、当事者が集まる機会や、定期的に困っている内容を吸い上げるような仕組みを持ってもらうことも重要だと考える。

- 障がいのある人も高齢者も、これからはどんどん増えていく時代なので、その方たちが住みやすくなれば、自ずと健常者にも優しいまちができるのではないか。